

# 三角線に乗ろう

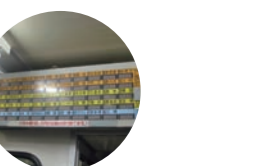
三角線をもっと楽しめよう  
 情報をご紹介します。  
 三角線の全便で活躍している  
 ワンマン式ディーゼルカー(気動車)の  
 「キハ31」の秘密を一挙公開!

**排気口!**  
 三角線の上空には、電線がない。三角線は軽油を燃料に走るディーゼル車(気動車)だから。屋根についている排気口から煙を吐き出しながら、険しい「山線」も走り抜ける



**あこがれの運転席**  
 廃車の部品が多用されている。古びた計器やハンドルから鉄道の歴史が偲ばれる

**水色のラインがトレードマーク**



**ワンマン運転仕様**  
 乗降口には、バスと見まがう整理券発行機(左)と運賃表示器(上)。乗り降りのしかたもバスと同じ

ドアはバスと同じ「折戸」

新幹線の座席で座り心地満点!

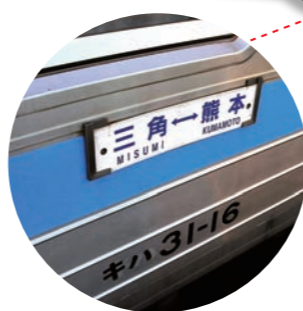
キハ31の座席シートは新幹線の「お下がり」。2人掛けと1人掛けのシートが並んでいる。背もたれも手すりも心地よく、ゆったりとした気分で旅を楽しめる賢い車両なのだ

**「キハ31」とは**  
 1987(昭和62)年の国鉄民営化の直前に、ワンマン運転対応、コストダウンのためにつくられた車両。通常より短い17mのステンレス車体を用いて車両を軽量化。車内部品には、廃止車両やバスで使われていたものが多用されている。リサイクル部品の「寄せ集め」でつくられた車両は、どこか古くはぐだけれど懐かしさがこみ上げる。居心地の良さは抜群!現在、8両のキハ31気動車が、三角線と肥薩線を走行している。



**昔懐かしい扇風機**  
 国鉄時代につくられた車両の証「JNR」が刻まれている。天井でぐるりと回りながら、やさしい風を送る  
 ※冷暖房は完備

**たまに別の車両を連れている**  
 三角線は基本一両編成。朝夕の混雑時は「キハ40」など別の車両が繋がっている



**今では珍しい「サボ」**  
 「サボ」とは、「サインボード」の略で、「行先票」のこと。三角線では、車体中央窓に取り付けられている



**天草グルメ快速 おこしき号**  
 土日祝日に1往復のみ運行。専用のヘッドマークが取り付けられ、車内では、沿線の観光案内が放送される。「おこしき号」の名前は、沿線北側に広がる美しい干潟「御興来(おこしき)海岸」にちなんでいる。

**三角線の心得 その1**  
**ワンマンカー ならではの極意 後ろ乗り、前降りを守るべし**

三角線の列車のほとんどがワンマン運転。乗務員は運転士のみで、車掌はいない。車両の後方に乗り口があり、降り口は前方、運転席の傍にある。乗車するときに、忘れてはならないことは、整理券を手にする。車両の前方に運賃表示器が設置してあり、停車駅ごとに運賃が表示される。各駅ごとに整理券番号があり、降りるときに整理券番号ごとに料金を調べることで、乗車するとすぐに赤い器械が出迎えてくれるので、整理券を一枚取る。また、料金を支払う際に備えて、小銭も用意したい。スムーズな乗り降りこそ、かっこいい旅人というものだ。



※宇土駅・住吉駅・網田駅・波多浦駅・三角駅では、乗車前に切符を購入することができます。

**三角線の心得 その2**  
**鉄道の旅の 楽しみを満喫 ゆったり、安全を心掛けるべし**

ローカル線のみならず、大切なことは時間に余裕を持った旅の計画を立てること。駆け込み乗車が危険なことはご承知の通り。さらに三角線には無人駅が多く、線路を渡ってホームに上がらなければならぬ駅も多い。時間に余裕がないと列車の直前を走り込んでしまい大変危険である。ゆったりとした時間の中で、ローカル線ならではの無人駅の風情などを楽しむことをお勧めしたい。海から山へ、さらに海へと移り変わる三角線の車窓は、時を追うごとに、季節ごとに変化する。乗る度に変わるその表情をぜひ感じていただきたいものだ。さらに隣席の人や地元の人々とおしゃべりするなど、ゆったり、のんびり「三角線旅」を満喫しよう。



**とってもキュート! 赤瀬駅の「プラベンチ」**  
 三角線の各駅にあるベンチは個性的だ。ありふれたプラスチックベンチでも、ベンキを塗ったり、塗らなかつたりで表情が変わる。また、使い込まれた木のベンチなどは、長い年月と人の温もりを感じさせるに十分な

## Column 線路の果て、空の向こう ローカル線に還ろう

かつて旅客の大群を乗せて走った三角線は、今静かな生活路線となつて生き続けている。無人駅が多くなり、駅舎が残っている駅も少なくなつた。宇土から三角へ向かう列車は、住宅地の中を抜けて田園地帯へと走り続ける。国道57号沿いは見慣れた風景のほずなのに、何かが違う。車窓から見える風景は、いつかなく緑が輝き、連なる家の庭先さえ目に留まる。目線が高いせいか、新鮮な光景が車窓を流れていくのだった。

ふと思ひ立って降りてみたのは「肥後長浜駅」。小さな切符入れが凛と背筋を伸ばして立っている。無人駅だから、コインがホームを仕切っているのだ。切符を入れて、辺りを見渡せば目の前は海。民家の脇へと続く小道は国

道へ続いている。木々の間から見える海はより一層蒼く、輝いて見えるようだ。いつもこんなに美しく澄んでいたのだろうか? 歩くことを止めてから、私たちは多くのものを失った。風が運ぶ季節の匂い、潮の香り。太陽の下で見る海の蒼さや空の高ささえも、ゆっくりと感じる余裕さえない。寸暇を惜しむ代償は思いのほか大きい。

列車に揺られていると、いろんなものが見えてくる。車窓に映る風景とその土地の暮ら。乗客の笑い声と、どこからか漂うミカンの匂い。カタコントンとリズムミカルに揺れているだけで、時間はゆっくと流れていく。誰もいない線路に降り立ったとき、その先に続くものは「未来」。いつもと同じ景色さえ違って見える新鮮な瞬間を列車の旅はつくっていく。だから鈍行列車の旅は止められない。さあ、今こそローカル線に還ろう。

